

伝統芸能

はな 花鼓 つづみ

「橋の端を筆を持って走る」阪井は基本だ。セリフはもち
中学一年生の秋、大阪からろんのこと、曲節にまで大阪
東京に転校した。初めての国訛りが絡んでくる。たとえば
語の授業の折、先生に「は 一走る」という言葉。大阪で
しのはしをはしをもってはしは抑揚つけず平坦に言うが、
る」と言ってみると言われ、東京では「はしる」の「し」
大阪弁で復唱した。教室内大をやや高く発音する。大阪弁
爆笑。受けに受けた。それにがベースになり言葉や節が成
味をしめ、以来、東京でも大立しているところに、東京の
阪井で通すことになった。 アクセントが頭をかすめる
言葉(人形浄瑠璃)は上方と、義太夫節のニュアンスが
が生んだ芸能である。だから、わずかに変化する。その「わ
ら、語り手の太夫にとり、大ずか」の積み重ねは、作品全

文楽太夫 豊竹英大夫



豊竹英大夫・東京・国立劇場で

はしのはしをはしを...

体に大きな歪みをもたらすことになりかねない。

太夫にとり、もう一つの関門は「義太夫声」。生まれつきの声の良し悪しは大事なポイントである。だが、それだけではいけないのが古典芸能の奥深さ。「義太夫声」をたゆまぬ修業で会得しなければならぬ。太夫は楽器(三味線)や道具(人形)を持たない身一つの商売。太夫らしい声、いわば、喉に楽器が形成されるのに二十年くらい要する。

言葉に入門したころ、先代の竹本綱大夫師匠にお稽古していただいた。「動進帳」の番卒の役。安宅の関所を通り抜けようとする義経・弁慶一行に、「通行ならぬ」と言い放す下役人の激しい長口上。稽古を繰り返すうち、途中で声が腫れて出なくなってきた。ところが、十日目あたりに、どうした加減かどつともなくでかい声が出た。その時の師匠の一言、「よっしゃ、お前は太夫になれるわ」は、大きな支えとなっている。